

葉の言と もとにも

うちだ かつやす
内多 勝康



1963年東京生まれ。東京大学教育学部卒業後、NHKに入局。30年間アナウンサーとして「首都圏ネットワーク」「NHKスペシャル」「クローズアップ現代」等のキャスターを務め、阪神淡路大震災や東日本大震災の緊急報道にも携わる。2016年にNHKを退職し、国立成育医療研究センターに新設された、医療的ケアが必要な子どもと家族のための短期入所施設「もみじの家」のハウスマネージャーに就任。社会福祉士の資格を持つ。今夏、ミネルヴァ書房より「医療的ケア」の必要な子どもたちを上梓。

『責任の先送り』

この夏は、四国・徳島の風物詩「阿波おどり」が、赤字問題で大きく揺れた。主催団体の4億円を超える累積赤字が発覚し、そのおどりで実行委員会が中止を宣言した「総踊り」を踊り手グループが独自に実施するという前代未聞の事態だった。毎年、赤字を計上しながら、その対策を後回しにしてきた長年の「ツケ」が回ってきたと指摘されている。

私は、このニュースに触れて、やはりこの夏に発覚した「中央省庁による障害者雇用率の水増し」とイメージがダブるのを感じた。まったく畑違いのニュースではあるが、同じ根っこを持っているのではないかと考えてくるからだ。この問題も、雇用する障害者の数を長年にわたって水増ししてきたという。つまりそこには「責任の先送り」という共通項が浮かび上がるのである。

常態化することで感覚が麻痺し、見るべきことが見えなくなってしまうのか。あるいは、前任者が問題視しなかったことを口実に、その悪習を無批判に踏襲することで思考停止に陥るのか。いずれにしろ、その負債は雪だるま式に膨れ上がり、不信や混乱、イメージダウンといった、深刻な社会的損失を残すことになる。

と、ここまででは、まるで評論家のように、上から目線になってしまった。後半は謙虚に、足元の問題を見つめてみたいと思う。

私は一昨年の春、30年間アナウンサーとして勤めたNHKを退職し、国立成育医療研究センターの医療型短期入所施設「もみじの家」のハウスマネージャーに就任した。対象とするのは、主に人工呼吸管理や痰の吸引などの医療的ケアが必要な子どもたちだ。

その子どもたちは、医療的ケアが必要だという理由で、ほとんどの場合、保育園に入れない。親と一緒にいられず学校に通えない。だから、母親は仕事を辞めざるを得ない。24時間続くケアは家族を心身ともに疲弊させ、地域の中で孤立を深めていく。

長い間、わたしたちの社会は、そうした現実を「家族の問題だ」として手を差し伸べようとしてこなかった。果たして、それで良いのだろうか。「医療的ケアがあるんだから、仕方ない」とフタをしてしまうことに正当性はあるのか。

このままの状態を放置することは、まさに「責任の先送り」となり、前半に記した2つの問題と同じ過ちを犯すことになる。私は思う。改めるべき事実が目の前に現れ、解決すべき課題と向き合った時には、速やかに正しい方向へ舵を切らなければいけない。それが、傷口を広げない唯一の処方箋だ。

このコーナーでは、著名人の方々に、大切にされていることについて寄稿いただきます。内多勝康さんは、10・11・12月号に登場いただきます。

